Osaka University Knowledge Archive

Title	祭式を裏付ける「知識」を巡って : 古ヴェーダ祭式文献におけるyá evám̐ vidvā́n / véda の使用法と哲学思想の発展
Author(s)	天野, 恭子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2016, 50, p. 29-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70024
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

祭式を裏付ける「知識」を巡って

――古ヴェーダ祭式文献における *yá eváṁ vidvā́n / véda* の使用法と哲学思想の発展――

天 野　恭 子

キーワード：ヴェーダ祭式文献／Maitrāyaṇī Saṁhitā／yá eváṁ véda／yá eváṁ vidvā́n

1. 序論

ヴェーダ（Veda）とは「知識」を意味し、その「知識」がヴェーダの宗教の拠り所である。知識こそが、宗教的な目的の成就を保証するものであったから、人々は彼らの貴重な教典をヴェーダと名付けたのである。このことは、*yá eváṁ véda / yá eváṁ vidvā́n*「このように知っていれば」「このように知って[... すれば]」というフレーズがヴェーダ祭式文献において繰り返し用いられることに表れている。このフレーズはAtharva-Veda（BC1000年前後）に始まり、brāhmaṇa（BC900~600年頃）、āraṇyaka及びupaniṣad（BC500年～）に至るまで、様々なジャンル乃至時代のヴェーダのテキストに見られる：[1)]

> AV 15,14,1-2 {*sá yát prā́cīṃ díśam ánu vyácalan mā́rutaṃ śárdho bhūtvā́nu-vyàcalan máno 'nnādáṃ kr̥tvā́*} *//1// mánasānnādénā́nnam atti yá eváṃ véda //2//*
>
> 彼（vrātya）が東方に向かって歩み出した時、Marut神群が生じ、食物の獲得へと思いを定め、歩み出した。食物の獲得へと定まった思いによって食物を（奪って）食す、このように知る者は。

Taittirīya-Saṁhitā I 5,8,3-4 {*gā́rhapatyaṃ vā́ ánu dvipā́do vīrā́ḥ prá jāyante*}. *yá eváṃ vidvā́n dvipádābhir gā́rhapatyam upatíṣṭhate // ā́sya vīró jāyate.*
gārhapatya祭火の方向に向かって勇者達は二本足でもって産まれる。
このように知って二本足（二行）［の讃歌］でもって gārhapatya 祭火を礼拝すれば、その者に勇者が生まれる。

Taittirīya-Āraṇyaka 5,2,8-9 {*yád valmīkavapā́ saṃbhāró bhávati \, ū́rjam evá rásaṃ pṛthivyā́ áva rundhe \, átho śrótram evá \; śrótraṁ hy etát pṛthivyā́ḥ \, yád valmī́kaḥ *}. *ábadhiro bhavati \, yá eváṃ véda \.*
白蟻の巣の土を［火壇の］材料とするならば、大地の滋養、エッセンスを得る。あるいはまた、聴覚を。というのもこれ — 白蟻の巣 — は、大地の聴覚だから。このように知るものは、耳が遠くならない。

Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad IV 1,3-4 *{prāṇó vaí, samrāṭ, paramáṃ bráhma}. nàinaṃ prāṇó jahāti, sárvāṇy enaṃ bhūtā́ny abhíkṣaranti, devó bhūtvā́ devā́n ápyeti, yá eváṃ vidvā́n etád upā́ste.*
最高の brahman とは、大王よ、気息なのだ。気息は彼を見捨てない、すべての存在が彼へと流れ来る、神となって神々に仲間入りする、このように知ってこの例のもの（気息）を崇めるならば。

当時の人々の世界観においては、今ここにある世界を成り立たせている自然の摂理はそのまま彼らの祭式の中に顕現し、その祭式をコントロールすることで様々な効力を生み出すことができた。その際重要なのは、自然の摂理がどうあって、それがどのように祭式に生き、どのように効力を生み出すか、という理屈が通っていることで、その理論を知らずには正しく祭式をコントロールし効力を得ることはできない。彼らにとって大切な「知識」とはそのようなものであった。

上の例においても、知識を持っていることが、食物を獲得したり、聴力を

保ったり、後継ぎを得ることに作用する。知識は、経済的、社会的、身体的、そしてBĀUの例に見られるように、宗教的に、効果を発揮するのである。「知識」の内容は様々で、上の例で{　}に括ったものがそれにあたるが、AVの例ではvrātya[2)]とMarut神群の出動という神話的事実であり、TSでは出産にまつわる一般的事実であり、TĀでは白蟻の巣の持つ宇宙論的背景であり、BĀUでは宇宙の最高原理brahmanと気息についての哲学的・宇宙論的事実である。時代が進むにつれ、知識が哲学的傾向を帯びてゆくことが見て取れ、思想の発展、宗教的価値観の変遷が「知識」の枠組みで述べられる議論の中にそのまま映し出されていると言える。

本稿においては、どのような事柄が「知識」として捉えられているか、ということを、一つの文献、brāhmaṇaの中で最も古いMaitrāyaṇī Saṁhitā（MS; BC900前後）、に例をとって詳しく検討したい。一つの文献の中においても、様々な価値観と、思想の様々な発展段階が存在することが、知識を巡る考察によって明らかになる。さらに、このような考察は、MSという文献の成立背景の解明に連なる。

2. Maitrāyaṇī Saṁhitā研究の視点

MSは、同じ黒Yajurvedaに属する同時代の姉妹文献、Kāṭhaka-Saṁhitā（KS）及びTaittirīya-Saṁhitā（TS）、と同様、その成立は明らかになっていない。祭式に用いる祭詞（mantra）が先に作られ、その後に解説の部分が付加されたと考えられているが、文献にそのように記述されている等の事実はない。年代については他の古代インドの文献同様、特定できる証拠が一切存在せず、成立時期はほぼすべて他の歴史的事象からの相対的な推論にすぎない。バラモン教の伝統の中で天啓書（「［天より］聞かれたもの」）と呼ばれることからも、作者も特定されることはなく、テキストが口頭伝承で伝えられるうちに現在の形になったと考えられている。MS, KS, TSは相互に似通った内容を持つが、原型となる一つの文献から枝分かれしたことに起因す

ると考えられている。相対年代については、一般的に、MSが最も古く、KSがそれに続き、TSは比較的新しいとされている。

しかし、著者の近年のMS研究により、MSの成立の過程を解明する新たな視点が示された。[3] それは、MSの各章が、異なった言語的特徴を示すという発見による。その違いは、文法的なものではなく、主に語彙の選択や言い回し、つまり主に記述スタイルに現れており、それぞれの部分（章）の作者の言語スタイルに起因するものと推測できる。つまり、各章が異なった作者によって（異なった背景において）成立したと考えることができるのである。mantraが古く、解説が新しい、という従来の二分年代論は、大きく見直されるべきで、mantraも解説も、成立はもっと多層的で、章（部分）ごとに作成され、古い章に新しい章が加わるというプロセスを繰り返して現存の内容が揃ったと考えられるべきであろう。

さらにはKS及びTSとの関係のあり方も、章によって異なることがわかってきた。[4] つまり、ある章はKSとの議論、意見交換の跡を示すが、ある章ではKSとの交流の痕跡が見られない。またある章は、対応するKSの章と、ほぼ借用関係と言えるような、ほとんど一致した文面を示す。TSとはほとんどの章で対応が見られないが、TSと近い関係を示す章もある。これらの事実から導き出されるのは、原型となる一つの文献から、三つの文献へと枝分かれして発展したという分岐型モデルではなく、それぞれの学派が交流や

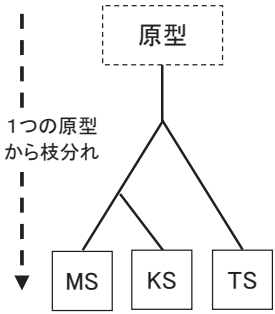

図１　黒Yajurveda文献成立
分岐型モデル

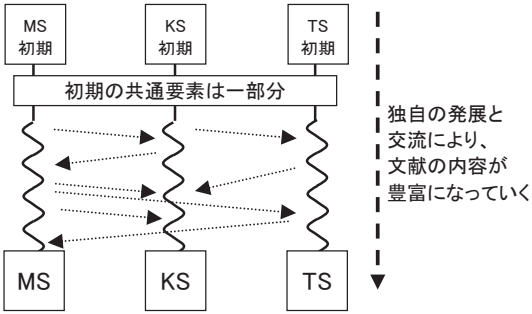

図２　黒Yajurveda文献成立 相互影響型モデル

借用をしながら文献の内容を充実させていったという、相互影響型モデルであろう。従って、MS が KS, TS より古い、といった従来の単純な相対年代論はもはや通用しない。

MS の各章がそれぞれ異なった作者によって、異なった背景のもと作られたという考察をさらに進めると、それぞれの作者（それぞれの章）同士の関係の考察へと向かう。語彙、言語スタイル及び記述内容の考察より、ある章がある章を前提としているという事実が分かるとすれば、それは作者同士の縦の関係（師弟関係）あるいは成立年代の新古を意味するであろう。ある章とある章とが非常に近い関係にあるとすれば、それは作者同士の交流関係や同時代の成立を意味すると言える。

この考察を MS, KS, TS の三つの文献の全体に拡げた時に初めて、文献の成立が明らかになる。それぞれの祭式が、どの時期に、どの文献（学派）で記述されたか、独自の記述なのか、他学派から借用したのか、ということが分かるようになる。このことは、当時の祭式、社会の発展の考察を大きく進めることになるであろう。

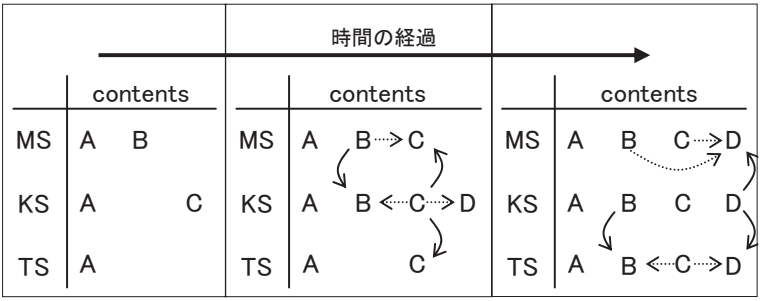

図3　黒 Yajurveda 各章の成立モデル

筆者は MS の記述の研究において以上の視点が有用であると考えている。故に、言語現象や内容（祭式と思想）について考察する場合、MS のどの章に現れるか、という分布を重要視している。本稿で扱う *yá eváṁ véda / yá eváṁ vidván* というフレーズは、祭式解釈の部分にのみ現れるため、ここでは祭式解釈の章立てとその内容を記す：

I 4	yajamāna	（新満月祭における）祭主の義務
I 5	agnyupasthāna	祭火の礼拝
I 6	ādhāna	祭火設置祭
I 7	punarādhāna	祭火の再設置
I 8	agnihotra	毎日の祭火への献供
I 9	caturhotṛ	caturhotṛ祭文
I 10	cāturmāsya	季節祭
I 11	vājapeya	戦車競走のためのsoma喫飲
II 1-4	kāmyā-iṣṭi	願望祭（穀物祭ヴァージョン）
II 5	kāmya-paśu	願望祭（犠牲獣祭ヴァージョン）
III 1-5	agniciti	火壇積み祭
III 6-10	soma adhvara	soma祭（準備祭）
IV 1	darśapūrṇamāsa	新満月祭
IV 2	gonāmika	雌牛の名付け
IV 3-4	rājasūya	王の即位祭
IV 5-8	soma graha	soma汲み

3. MSにおける *yá evā́m véda / yá evā́m vidvā́n*

3.1. 誰が「知る」のか？

MS における *yá evā́m véda / vidvā́n* の例は 163 例を数える。その用例では、祭式行為を裏付ける知識が述べられ、「そのように知るならば」「そのように知って行為を行うならば」効力が得られる、と述べられる：

I 6,7(4a):98,2-4 *vāravantī́yaṁ vái sṛ̥ṣṭvā́ prajā́patir, yáṃ kā́mam ákāmayata, tám ārdhnot. tám evá kā́mam ṛ̥dhnoti yájamāno, yáṃ kā́maṃ kāmáyamāno 'gním ādhatté, yá evā́m vidvā́n vāravantī́yaṃ gā́yate.*

vāravant（sāman）を創出した後、Prajāpati は望んだ願望を成就した。

このように知って（祭官に）vāravant（sāman）を歌ってもらうならば、祭主は、そういう願望を持って祭火を設置する、その願望を成就することになる。（Amano 2009:234-235）

まず重要なのは「知る」のは誰なのかということである。Veda の知識とは祭式についての特別な知識であり、祭官がその知識を独占していたと一般的に理解されているが、例から分かるように *yá eváṁ véda / vidvā́n* の主語は祭主（祭官を雇って祭式をしてもらう、祭式の主催者）である。少数の例外を除き、MS のほぼすべての例がこのことを示している。

3.2. 知って何をするのか？

では、祭主が「知る」のはどのような場面あるいは状況においてなのだろうか。MS の散文部分は祭式を巡る記述であり、知識の働きも祭式場裏の枠内で述べられるが、さらに詳しく見てみたい。そのために、*yá eváṁ vidvā́n*「このように知って... するならば」の文における、知って行う行為が何かを考察する。*yá eváṁ vidvā́n* の例は 63 例を数えるが、知って行う行為は、次の 3 つに分類できる：1）祭式（そのもの）の挙行（23 例）、2）個々の祭式行為（33 例）、3）一般的な行為（7 例）：

1）I 10,5(1):145,3f. *yá eváṁ vidvā́n cāturmāsyáir yájate*「このように知って季節祭を開催するならば」(Amano 2009:356),
2）III 8,3:96,12f. *yá eváṁ vidvā́n védiṃ cottaravedíṃ ca kuruté*「このように知って vedi と uttaravedi を作るならば」,
3）I 11,5(3):166,15f. *yá eváṁ vidvā́n ánnam átti*「このように知って食物を食べるならば」(Amano 2009:409).

1）の例は I 巻、とりわけ古い章であると推測される I 6 と I 8[5)] に繰り返し現れることから、MS における *yá eváṁ vidvā́n* の本来の使用法であると考

えられる。同様の例として以下の文が見られる：

I 5（agnyupasthāna 章 ; 2 例）*yá eváṁ vidvā́n agníṁ upatíṣṭhate*「このように知って祭火を礼拝するならば（agnyupasthāna を行うならば）」,

I 6（ādhāna 章 ; 10 例）*yá eváṁ vidvā́n [...] agníṁ ādhatté*「このように知って祭火を設置するならば（ādhāna を行うならば）」,

I 7（punarādhāna 章 ; 2 例）*yá eváṁ vidvā́n punarādhéyam ādhatté*「このように知って祭火の再設置を行うならば（punarādheya を行うならば）」,

I 8（agnihotra 章 ; 4 例）*yá eváṁ vidvā́n agnihotrám juhóti*「このように知って agnihotra を献じるならば」,

I 10（cāturmāsya 章; 2 例）上の I 10,5（1）の例を見よ,

III 1-5（agniciti 章 ; 1 例）*yá eváṁ vidvā́n agníṁ cinuté*「このように知って火壇を積むならば（agniciti を行うならば）」,

IV 1（darśapūrṇamāsa 章 ; 1 例）*yá eváṁ vidvā́n yájate*「このように知って（新満月祭を）開催するならば」.

これらの例において、祭主は祭式の正当性を裏付ける知識を得た後に、その祭式を挙行する。つまり、知識は、祭主に祭式の価値を納得させ、祭式の開催へと誘うものであると言える。知識の教授により、彼らの祭式の普及を意図していることが見て取れる。[6)]

非常に興味深いことに、*yá eváṁ véda / vidvā́n* の例が全く現れない章があり、それは王の即位祭の章である。この祭式における祭主はもちろん王（rājanya）であるが、この場合祭主たる王が「知る」ことは必要と考えられていなかったと言える。このことは、王族階級は祭式の知識を得ることから排除されていたか、[7)] あるいは政治的な色の強い祭式であるため、祭主の宗教的知識が問われなかったかを意味すると考えられる。

4. 何が知識なのか: *yá eváṁ véda / vidvā́n* の使用法

それでは、*yá eváṁ véda / vidvā́n*「このように知るならば / 知って... するならば」が文脈の中にどのように現れるのか、実際の使用法を見ていきたい。その際焦点となるのは、「このように」の指す内容、つまり知識の内容とされるものが、どのようなものであるのか、ということである。

4.1. 神話

知識の内容が、神々が太古に行ったこと、つまり神話であることは多い。MS では神話は imperfect の時制で述べられるが、そのような神々の過去の行為に由来するものとして、現在の祭式行為とその効果が present の時制で述べられる。上で見た I 6,7(4a) の例はこの用法を示していた：

> I 6,7(4a):98,2-4 vāravant (sāman) を創出した後、Prajāpati は望んだ願望を成就した。このように知って（祭官に）vāravant（sāman）を歌ってもらうならば、祭主は、そういう願望を持って祭火を設置する、その願望を成就することになる。

次の 2 例も、神話が知識の内容を構成している：

> I 8,1(1):114,11 - I 8,1(4):116,5 *prajā́patiḥ prajā́ asr̥jata. sá vā́ agním evā́gre mūrdhatò ’sr̥jata. ... sò ’smāt sr̥ṣṭáḥ párāṅ aid bhāgadhéyam ichámānaḥ. sá tád evá nā́vindat prajā́patir, yád áhoṣyat. táṁ svā́ vā́g abhyàvadaj “juhudhi=” íti. sá itá evónmṕjyājuhot [// svā́hā //] íti. ... tásyā ā́hutyāḥ púruṣo ’sr̥jyata. dvitī́yām ajuhot. tátó ’śvo ’sr̥jyata. ... tr̥tī́yām ajuhot. táto gáur asr̥jyata. caturthī́m ajuhot. tátó ’vir asr̥jyata. pañcamī́m ajuhot. táto ’jā́sr̥jyata. ṣaṣṭhī́m ajuhot. táto yávo ’sr̥jyata. saptamī́m ajuhot. táto vrīhír asr̥jyata=. eté saptá*

grāmyā́ḥ paśávo ’sr̥jyanta. tā́n evā́varunddhe, yá evā́m̐ vidvā́n agnihotrā́m juhóti.

Prajāpati は諸生物を創出した。その際最初に Agni を頭から創出したのだ。... その彼（Agni）は彼（Prajāpati）から創出されて、分け前を求めて離れて行った。その際 Prajāpati は、献供できるようなものを見い出せなかった。彼に自分の言葉が「献じよ」と語りかけた。そこで彼はここ（額）から拭い取って「svāhā」と言って献じた。... その献供から人間が創出された。二つ目［の献供］を献じた。そこから馬が創出された。... 三つ目［の献供］を献じた。そこから雌牛が創出された。四つ目［の献供］を献じた。そこから羊が創出された。五つ目［の献供］を献じた。そこから山羊が創出された。六つ目［の献供］を献じた。そこから大麦が創出された。七つ目［の献供］を献じた。そこから米が創出された。以上の七種の家畜（及び農作物）が創出された。［祭主が］このように知って agnihotra を献じるならば、それらを自分のものにする。（Amano 2009: 277-280）

I 6,3(1):89,8-13 *prajā́patir vā́ idám ágra āsīt. táṁ vīrúdho ’bhyàrohann. asuryò vā́ etā́, yád óṣadhayas. tā́ ⁺atitíṣṭighiṣann ˣatiṣṭíghaṃ nā́śaknot. sò ’śocat. sò ’tapyata. táto ’gnír asr̥jyata. tám agníṁ sr̥ṣṭáṁ vīrúdhāṃ téjo ’gachat. tā́ aśuṣyan. ná tátaḥ purā́śuṣyant. sá prajā́patir agním ā́dhatta= “imā́ evā́ sahā” íti. tā́ asahata. tát, sā́ḍhyai vā́váiṣá ā́dhīyate. tád, yáthādó vasantāśiśirè ’gnír vīrúdhaḥ sáhata, evā́ṁ sapátnaṃ bhrā́tr̥vyam ávartiṁ sahate, yá evā́ṁ vidvā́n agním ādhatté.*

Prajāpati が原初この［地上のすべて］であった。彼に植物が覆いかぶさった。これ―草本―は Asura 側のものなのだ。［Prajāpati は］その上へ上がろうとしたが上がれなかった。彼は苦しんだ。そして熱を発した。そこから Agni が創出された。そうして創出された Agni に植物の光熱が行った（寄せつけられた）。するとそれは枯れた。それ以前は枯れ

なかった［が］。そこでPrajāpatiは「これをやっつけよう」と［考えて］Agniを［彼の祭火として］設置した。そしてそれをやっつけた。だから［こう言える］：この［祭火の］設置は実際にはやっつけるために行われるのだ。だから、［祭主が］このように知って祭火の設置を行うならば、その時期—春と寒期の間—にAgniが植物をやっつけるように、そのように、敵、ライヴァル、不如意をやっつける。（Amano 2009: 209-210）

このような例に見られるのは、祭式の意義を神話に求める、伝統的な傾向である。祭式の由来である、神々の物語を知ることこそが「知識」である、という態度と言える。

4.2. 長い説明

上のI 8,1(1):114,11 - I 8,1(4):116,5及びI 6,3(1)が説明する神話は、事の始まりから、物語の経過、結末までを含む、長いものであった。このような神話の全体を知ってこそ「知識」であるとする態度は、下の4.4-5に見られる、一つの同置のみを知識とする傾向とは対照的である。

4.3. 神話と祭式の繋がり

I 6,3(1)ではさらに、神話部分の後に、*tát, sā́ḍhyai vā́váiṣá ā́dhīyate*「だから［こう言える］：この［祭火の］設置は実際にはやっつけるために行われるのだ」の一文が加えられていた。これは、神話が現在の祭式に連なっていることを明確にするために述べられている。さらには、*tád, yáthādó vasantāśiśirè 'gnír vīrúdhaḥ sáhata, evám* ...「だから、その時期—春と寒期の間—にAgniが植物をやっつけるように、そのように...」と、Agniの行為になぞらえて祭主の行為があることを、*yáthā ... evám*の語法によって強調している。「知識」として、神話そのものだけでなく、神々の行為と現在の祭式の繋がりを重視していると言える。この*yáthā ... evám*を用いる用法は、MS

において 8 例見られるが、そのうちの 7 例が I 6 章である。[8] 神話と祭式の繋がりを丁寧に説明するのが、この章のスタイルと言ってよいであろう。

4.4. 普遍的命題、世界知

神話を知識の内容とするのとは異なり、普遍的命題、世界知、と言えるような事柄が知識の内容となっている例も見られる：

> I 8,6(3b):124,7-9 *gṛhṇīyā́n náktam agním. asuryà̄ vái rā́trir. jyótiṣaivá támas tarati. dívā ha vā́ asmā asmíṃl loké ˇbhávati, prā́smā asáu lokó bhāti, yá eváṁ véda.*
> 夜中に火を採る。夜は Asura 側のものなのだ。光によって闇を渡ることになる。このように知るならば、その者にとってこの世界は昼となり、かの世界は彼のために輝くのだ。（Amano 2009:306）

> I 9,5(2b):136,6-7 *svargā́ya lokā́ya káṁ saumyò ’dhvará ijyatā. éti svargáṃ lokáṁ, yá eváṁ véda.*
> 天界のために soma 祭が行われる。このように知るならば天界へ行く。（Amano 2009: 338）

これらの例では、「夜は Asura 側のものである」「soma 祭というのは天界［へ行く］ために行われるものだ」という、当時の人々の世界の事象についての理解、彼らにとっての（科学的）事実が知識の内容となっている。*asuryà vái rā́tris* のような同置文（「A は B なのだ」）が多く見られ、普遍的事柄を表す indicative present の文も見られる。

このような論じ方は、世界の事象を（彼らにとって）科学的、普遍的に捉えて、彼らの祭式の根拠とするものであり、そのような科学的、普遍的事実を「知識」とする態度は、4.1-3 に見た、祭式の由来を神話に求めそれを「知識」とする態度に比べると、より哲学的な傾向に発展していると言える。

4.5. 簡潔な命題

このような普遍的事実は、上の例に見られるように、非常に簡潔に述べられることが多い。次の例も一文（実質二語）から成る大変簡潔な「知識」を示す：

> I 5,9(3):77,14f. *trír āha; tríṣatyā hí devā́. rócate ha vā́ asya yajñó vā bráhma vā, yá evā́m̐ véda*.
> 三回唱える。神々は三様に実現するから。このように知るならば、彼の祭式あるいはbrahmanは輝く。（Amano 2009: 191）

このような簡潔さも、物事の背景を原理・原則に集約させようとする、哲学的思考の発展の一局面と捉えられるのではないだろうか。

4.6. 語られない背景

神話であれ、普遍的事実であれ、それを知ることによってある効果が得られると考えられているが、その知識と効果の関連は比較的容易に理解できる。上のI 6,7(4a)、I 6,3(1) の例では、知識の内容である神々の行為と、祭主の得る効果が、同じ語彙で表現されており（*ārdhnot - ṛ̥dhnoti, asahata - sahate*）、関連は一目瞭然である。I 8,1(1) は家畜達を、I 9,5(2b) は天界を巡る議論であり、論点が明確で、I 8,6(3b) は、夜＝闇を光によって渡るという、自然に理解できる論理である。

しかし、前のI 5,9(3) は、神々が*tríṣatya-*であることと、祭式とbrahmanが輝くことに、何らかの神々の作用が想定されるものの、この文面からだけでは論理的な繋がりを理解することはできない。何らかの背景があるが、それを語ることなく、背景を含めて「知識」と捉えている。このような現象は次の例にも見られる：

III 7,8:85,13-17 *sómo vā́ amútrāsīt. té devā́ gāyatrī́ṃ prā́hinvann: "amúṁ sómam ā́hara=" íti. sā́ vítataṁ yajñám ávāpaśyat. sáikṣata: "yád yajñásyāntareṣyā́my, ātmā́nam antáreṣyāmi=" íti. tásyai vā́ etáṁ sómo jīvagrahā́ṃ prā́bravīt. [svajā́ asi, svabhū́r asi=] íti. sómasya vā́ eṣá jīvagrahā́ḥ. sómasya vā́ etáj jīvagrahā́ṃ gṛhṇīte. nā́dhvaryúḥ sán nā́rtiṃ ā́rchati, yá evā́ṁ véda.*
Soma はかの世界にあったのだ。そこで神々は、「あそこにいる Soma を連れて来い」と言って Gāyatrī を遣わした。彼女は祭式が繰り広げられているのを眼下に見た。彼女は見てわかった、「祭式［の犠牲］を分断したら、私自身を分断することになるだろう」と。彼女に Soma は例のように生け捕りを申し立てた。「お前は自ら生まれた者だ、お前は自ら存在するものだ」：これが soma の生け捕り（のための mantra）なのだ。このようにして soma を生け捕っていることになるのだ。このように知るならば、adhvaryu 祭官でなくても危害に遭うことはない。

soma を生け捕りにすること（新鮮なまま持って来ること）の由来が語られている。その知識によって「危害に遭うことはない」のは、「祭式を分断したら、私自身を分断することになるだろう」という Gāyatrī の心中の言葉に関連づけると理解できるが、「adhvaryu 祭官でなくても」がどう関連するかは、文脈からは読み取ることができない。ここでも、語られない背景があると考えられる。

祭式に関する知識を伝達し、祭式の価値を知った人々が積極的な祭式の開催へと動機づけられるということは、知識の重要な効果であったと考えられる。3.2 での考察と、4.1-3 の「神話語り」に見られる丁寧な知識の教授スタイルを併せて考えると、I 6 と I 8 を中心とする伝統的な章においては、知識がこれから祭式へと誘われる人々のためのものと考えらていたことが見て取れる。それに対して、上で見た、語られない背景をも含んだ知識、背景を知らないと理解できない論理は、むしろ議論のプロフェッショナルと言うべき人々の間で交わされていたと想定できるのではないだろうか。それは、MS

の祭式記述作成の舞台（祭式専門家のコミュニティ）が、哲学的議論の成熟を迎えた段階を示唆するものであると考えられる。

4.7. 定型表現の頻出

祭式議論の成熟を示す可能性のある、他の現象として、定型表現の頻出が挙げられる。次の例に見られる、神々と Asura 達の争いの顛末は、様々な場面に当てはめられながら、同じ表現で繰り返し語られる：

> I 9,3(1):132,16-18 *dákṣiṇena hástena devā́n ásṛjata, savyénā́surāṁs. té devā́ vīryàvantó ’bhavan, mṛddhā́ ásurās. táto devā́ ábhavan, párā́surās. tád, yá eváṁ véda, bhávaty ātmánā, párāsya bhrā́tṛvyo bhavati.*
> ［Prajāpati は］右手によって神々を創出した、左［手］によって Asura 達を。だから神々は力強くなった、Asura 達は非力に。そのことから神々は栄え、Asura 達は衰退した。だから、このように知るならば、自分自身は栄え、彼のライヴァルは衰退する。（Amano 2009: 328）

> IV 5,6:72,2-5 *té devā́ antaryāmám apaśyaṁs. tám agṛhṇata. ténā́surān ebhyó lokébhyo ’ntárdadhata. táto devā́ ábhavan, párā́surās. tád, yá eváṁ vidvā́n antaryāmáṃ gṛhṇītè, ’ntaryāménaivá +bhrā́tṛvyam ebhyó lokébhyo ’ntárdhatte, bhávaty ātmánā, párāsya bhrā́tṛvyo bhavati.*
> そこで神々は antaryāma（杯）を観得した。それを汲んだ。それによって Asura 達をこの諸世界から排除した。そのことから神々は栄え、Asura 達は衰退した。だから、このように知って antaryāma（杯）を汲むならば、antaryāma（杯）によってライヴァルをこの諸世界から排除する、自分自身は栄え、彼のライヴァルは衰退する。

この表現は、MS 全体に 11 例現れる。この神話の出来事がよく知られ、表現も定型化した段階が想定される。これは、祭式議論のある種の成熟である

と考えられるが、4.6 に見られるような祭式哲学の背景をよく知った専門的な議論とは異なっている。神話的知識の一般化とでも言う局面を示していると考えられる。次の表現も、定型表現として挙げられる：

> II 5,4(3):52,3-5 *sá vatsáṁ vāyávā álabheta. vāyúr vā́ anáyor vatsó. vāyúr imé prádāpayati. prátte ha vā́ imé duhe, yá eváṁ véda.*
> その者は Vāyu に捧げる仔牛を捉まえる（用意する）べきである。Vāyu はこの両者（天地）の仔牛なのだ。Vāyu がこの両者（天地）に催乳を施す。このように知るならば、催乳を施されたこの両者（天地）から乳を得ることになるのだ。（Amano 2009: 566）

duhe「乳を得る」は *yá eváṁ véda / vidvā́n* に伴う効果として現れ、MS 全体で 21 例を数える。そのうち *prátta- ... duhe* の表現は 7 例に見られ、一つの定型表現と見なされる。

定形表現の使用は、スタイルの確立と見られると同時に、記述の陳腐化であるとも言える。このことは 4.9「形式的な繰り返し」にもあてはまると考えられる。

4.8. 先達の教え

これまで、知識の内容として、神話と普遍的事実の二つのカテゴリーを考察した。三つ目のカテゴリーと言えるのは、先達の教えである：

> I 4,10(2):58,5-9 *[agnér jihvā́si...] íti puroḍāśyàn ā́vapati. devátānāṁ vā́ eṣá gráho. devátā vā́ etád agrahīd. etád dha sma vā́ āhāruṇá áupaveśir "áhutāsu vā́ ahám ā́hutiṣu devátā havyáṃ gamáyāmi, sáṁsthitena yajñéna saṁsthā́ṃ gachāmi="[9] íti. tád, yá eváṁ véda=, áhutāsv eváṣyā́hutiṣu devátā havyám gáchati, sáṁsthitena yajñéna saṁsthā́ṃ gachati.*
> 「お前は Agni の舌である。...」と言って、祭餅の材料を（器に）撒き入

れる。これが諸神格の取り込みなのだ。このようにして諸神格を取り込んだことになる。Aruṇa Aupaveśi は次のように言ったものだった、「私は献供が献じられていないのに諸神格へと供物を届け、祭式が完了していないのに終了に至る」と。だから、このように知るならば、献供が献じられていないのに、その者の供物が諸神格に届き、祭式が完了していないのに終了に至る。（Amano 2009: 159）

この用法は、神話や普遍的事実を知識とするのとは、全く異なった局面を示している。祭式の由来を神話や哲学議論に求めるのではなく、先達がそのように行った、あるいは言ったので、そのようにすべし、という態度である。神話や哲学議論について積極的に理解を深める局面になく、すでにある程度確立された祭式の伝統に従うことに主眼を置いていると言える。

4.9. 形式的な繰り返し

yá eváṁ véda / vidvā́n が、ある形式にあてはめられ、繰り返し現れる例がある。事物を列挙し、その説明を同じ形式で繰り返すのは、upaniṣad ではよく見られるスタイルであるが、MS などの古層の brāhmaṇa ではほとんど見られない。このようなスタイルは MS では限られた章、I 9 と IV 2 のみに現れる：

I 9,5(2a):135,15-136,2
ā́yuṣe kám agnihotráṁ hūyate. sárvam ā́yur eti, yá eváṁ véda.
cákṣuṣe kám darśapūrṇamāsā́ ijyete. ná cákṣuṣo gṛhe, yá eváṁ véda.
śrótrāya kám cāturmāsyā́nījyante. ná śrótrasya gṛhe, yá eváṁ véda.
vācé cātmáne ca kám saumyò ’dhvará ijyate. ná vācó nā́tmáno gṛhe, yá eváṁ véda.
寿命のために agnihotra が献じられる。このように知るならば完全な寿命に至る。

視力のために新満月祭が行われる。このように知るならば視力に困ることはない。
聴力のために季節祭が行われる。このように知るならば聴力に困ることはない。
発声と体のために soma 祭が献じられる。このように知るならば発声と体に困ることはない。（Amano 2009: 336-337）

IV 2,13:36,8-16

tā́ṃ devā́ aduhra háritena pā́treṇa yajñáṃ cāmṛ́taṃ ca.
duhé yajñáṃ cāmṛ́taṃ ca, yá evā́m̐ véda=.
átha pitáro ’duhra rajaténa pā́treṇórjaṃ ca svadhā́ṃ ca.
duhá ū́rjaṃ ca svadhā́ṃ ca, yá evā́m̐ véda=.
átha manuṣyà aduhra dārupātréṇā́nnaṃ ca prajā́ṃ ca.
duhé ’nnaṃ ca prajā́ṃ ca, yá evā́m̐ véda=.
áthā ṛ́ṣayo ’duhra camaséna chándām̐si ca paśū́m̐ś ca.
duhé chándām̐si ca paśū́m̐ś ca, yá evā́m̐ véda=.
átha gandharvāpsaráso ’duhra puṣkarparṇéna púṇyaṃ gandháṃ.
duhé púṇyaṃ gandhā́m̐, yá evā́m̐ véda=.
átha sarpā́ aduhrālā́punā viṣáṃ.
duhé bhrā́tṛvyāya viṣā́m̐, yá evā́m̐ véda=.
áthā́surā aduhrāyaspātréṇa srávatā́bhūtiṃ ca párābhūtiṃ ca.
duhé bhrā́tṛvyāyā́bhūtiṃ ca párābhūtiṃ ca, yá evā́m̐ véda.
神々が、金の乳桶でもって、その［雌牛］を搾って祭式と不死とを得た。
このように知るならば、祭式と不死とを搾って得る。
そして、父祖達が、銀の乳桶でもって、滋養と自己決定とを得た。
このように知るならば、滋養と自己決定とを搾って得る。
... このように知るならば、食物と子孫とを搾って得る。
... このように知るならば、韻律と家畜とを搾って得る。

... このように知るならば、良い香りを搾って得る。
... このように知るならば、ライヴァルに毒を搾り出す。
... このように知るならば、ライヴァルに成就しないことと衰退することを搾り出す。

このスタイルは、事物の列挙、事物と属性の関連付け、と言った、思考形式の確立を示している。その一方で、一つの事象について、神話的背景があったり、それが現在の祭式にどのように連なっているか、といった、丁寧な説明、生きた描写を欠き、記述の陳腐化であるとも言える。

4.10. 祭式行為への関心の薄れ

このような例においては、個々の祭式行為（例えば上の IV 5,6 で問題になるような）についてはほとんど着目されていないようである。むしろ、事物の列挙と属性の分類そのものが知識であり、それのみによって効果を得ているように見える。祭式の意義を深めるよりもむしろ、知識そのものに価値を置く傾向にあると言える。4.9 に挙げたような繰り返しでは、*yá eváṁ véda* が専ら用いられている。すべての *yá eváṁ véda* の例について、祭式行為を問題にしていない、とは言えないが、*yá eváṁ véda* を多用する章について、知識そのものに価値を置く傾向が強まっていると理解できるであろう。

5. MS における使用法の分布

上の 4 で見た、*yá eváṁ véda / vidvā́n* の様々な用法が、MS においてどのように分布しているかについて、数値データを見てみたい。それぞれの用法がどの章に多く現れるかを分析することによって、章ごとの特徴が抽出できる。

まず最初に、*yá eváṁ véda / vidvā́n* の用例数を示す。

表1　*yá eváṁ véda* 及び *yá eváṁ vidvā́n* の用例数

章	I 4	I 5	I 6	I 7	I 8	I 9	I 10	I 11	II 1-4	II 5	III 1-5	III 6-10	IV 1	**IV 2**	IV 5-8
用例	6	6	17	2	10	19	3	3	4	3	18	17	13	**45**	13

IV 2 に突出して用例が多い。I 7, I 10, I 11 には用例が少なく、II 巻は全巻の中で一番用例が少ない。（III 1-5, III 6-10 は多くの用例を含むが、章そのものが大きいことによる。頻度は高くない。）以下の考察では、正しく章の特徴を抽出するために、用例の少なかった章については用例の頻度を求めない。

次に、3.2 で考察した *yá eváṁ vidvā́n* に続く行為が何か、について、1）祭式そのもの、2）個々の祭式行為、3）一般的な行為、に分類しそれぞれの分布を見る：

表2　1）祭式そのもの、2）個々の祭式行為、3）一般的な行為、の用例数 / *yá eváṁ vidvā́n* の用例数

章	I 4	I 5	I 6	I 8	I 9	III 1-5	III 6-10	IV 1	IV 2	IV 5-8
1）	0/0	2/3	**10/14**	**4/4**	0/5	2/5	0/11	1/4	0/1	0/7
2）	0/0	0/3	4/14	0/4	5/5	3/5	**10/11**	2/4	1/1	**7/7**
3）	0/0	1/3	0/14	0/4	0/5	0/5	1/11	1/4	0/1	0/7

それぞれの項目について、強く傾向を示す章を挙げる：

祭式そのものの開催　　I 6, I 8.

個々の祭式行為　　III 6-10, IV 5-8.[10)]

次に 4.1, 4.4, 4.8 で考察した知識の内容について、1）神話、2）普遍的事実、3）先達の教え、に分類しそれぞれの分布を見る：

表3　1）神話、2）普遍的事実、3）先達の教え、の用例数 / すべての *yá eváṁ véda* 及び *yá eváṁ vidvā́n* の用例数

章	I 4	I 5	I 6	I 8	I 9	III 1-5	III 6-10	IV 1	IV 2	IV 5-8
1）神話	0/6	1/6	13/17	5/10	11/19	6/18	13/17	4/13	26/45	7/13
	0%	17%	**76%**	50%	58%	33%	**76%**	31%	58%	54%
2）普遍	3/6	4/6	4/17	4/10	8/19	12/18	4/17	9/13	16/45	6/13
	50%	**67%**	24%	40%	42%	**67%**	24%	**69%**	36%	46%
3）先達	**3/6**	1/6	0/17	1/10	0/19	0/18	0/17	0/13	3/45	0/13

次のように、それぞれの傾向を示す章を挙げることができる：

神話　I 6, III 6-10.

普遍的事実　I 5, III 1-5, IV 1.

先達の教え　I 4.

次に、4.3で考察した、神話と祭式の繋がりの説明について、分布を見る：

表4　神話と祭式の繋がりを説明する用例数 / すべての *yá eváṁ véda* 及び *yá eváṁ vidvấn* の用例数

章	I 4	I 5	I 6	I 8	I 9	III 1-5	III 6-10	IV 1	IV 2	IV 5-8
繋がりの説明	0/6	0/6	6/17	5/10	0/19	2/18	8/17	2/13	11/45	5/13
	0%	0%	**35%**	**50%**	0%	11%	**47%**	15%	24%	**38%**

この傾向を強く示すのは次の章である：I 6, I 8, III 6-10, IV 5-8.

次に4.2, 4.5で考察した、長い説明と簡潔な説明について分布を見る。長い説明は10文以上、簡潔な説明は4文以下を基準とした：

表5　1）長い説明の用例数, 2）短い説明の用例数 / すべての *yá eváṁ véda* 及び *yá eváṁ vidvấn* の用例数

章	I 4	I 5	I 6	I 8	I 9	III 1-5	III 6-10	IV 1	IV 2	IV 5-8
1）長い説明	1/6	1/6	5/17	5/10	1/19	1/18	11/17	1/13	3/45	3/13
	17%	17%	29%	**50%**	5%	6%	**65%**	7%	7%	23%
2）短い説明	5/6	5/6	9/17	2/10	14/19	12/18	3/17	11/13	29/45	7/13
	83%	**83%**	53%	20%	**74%**	**67%**	18%	**85%**	**64%**	54%

それぞれについて、次の章が強い傾向を示す：

長い説明　I 8, III 6-10.

簡潔な説明　I 4, I 5, I 9, III 1-5, IV 1, IV 2.

次に4.6で考察した背景の見えない論理について分布を見る：

表6　背景の見えない論理の用例数 / すべての *yá eváṁ véda* 及び *yá eváṁ vidvấn* の用例数

章	I 4	I 5	I 6	I 8	I 9	III 1-5	III 6-10	IV 1	IV 2	IV 5-8
用例数	0/6	1/6	0/17	0/10	0/19	7/18	7/17	6/13	19/45	2/13
	0%	17%	0%	0%	0%	**39%**	**41%**	**46%**	**42%**	15%

次の章が強い傾向を示す：III 1-5, III 6-10, IV 1, IV 2.

次に4.7で考察した、定型表現について分布を見る：

表7　定型表現の用例数 / すべての *yá eváṁ véda* 及び *yá eváṁ vidvấn* の用例数

章	I 4	I 5	I 6	I 8	I 9	III 1-5	III 6-10	IV 1	IV 2	IV 5-8
定型表現	1/6	0/6	0/17	2/10	4/19	6/18	11/17	4/13	7/45	2/13
	17%	0%	0%	20%	21%	**33%**	**65%**	**31%**	16%	15%

次の章が強い傾向を示す：III 1-5, III 6-10, IV 1.

次に4.9で考察した、形式的な繰り返しについて分布を見る：

表8　形式的な繰り返しの用例数 / すべての *yá eváṁ véda* 及び *yá eváṁ vidvấn* の用例数

章	I 4	I 5	I 6	I 8	I 9	III 1-5	III 6-10	IV 1	IV 2	IV 5-8
繰り返し	0/6	0/6	0/17	0/10	**8/19**	0/18	0/17	0/13	**10/45**	0/13

次の章が強い傾向を示す：I 9, IV 2.

次に4.10で言及した、*yá eváṁ véda* の使用について、分布を見る：

表9　*yá eváṁ véda* の用例数 / すべての *yá eváṁ véda* 及び *yá eváṁ vidvấn* の用例数

章	I 4	I 5	I 6	I 8	I 9	III 1-5	III 6-10	IV 1	IV 2	IV 5-8
yá eváṁ véda	6/6	3/6	3/17	6/10	14/19	13/18	6/17	9/13	44/45	6/13
	100%	50%	18%	60%	**74%**	**72%**	35%	**69%**	**98%**	46%

次の章に *yá eváṁ véda* の割合が高い：I 4, I 9, III 1-5, IV 1, IV 2.

6. *yá eváṁ véda / vidvấn* の使用法の変遷：MSにおける思想の潮流

4. の考察の結果、5. の用例の分布から、MS 各章における *yá eváṁ véda / vidvấn* の使用法の特徴が浮かび上がる。さらにそれらを俯瞰すると、MS において祭式思想の潮流のあることが見て取れる。ここでは、伝統的価値観、祭式哲学の成熟、新な哲学議論のスタイル、の三つのグループに分け、MS において祭式思想がどのように変遷したかを記述することを試みる。このことは、MS がどのような過程で編纂されたか、ということの理解に繋がるも

のである。

6.1. 伝統的価値観

祭式の由来を神々の行為に求め、神話を知識の拠り所とする、そのような価値観は、Ṛgveda の世界観を受け継ぐ伝統的な祭式思想のあり方であると言えるであろう。このような価値観を持つのは、I 6, I 8, III 6-10 である。神話の説明において、神話と現在の祭式の繋がりにも言及し、比較的長い丁寧な説明を施しているのが見て取れる。I 6 及び I 8 は、祭主が知識を得ることによって祭式の開催へと動機付けられることを示す例を多く含む。知識の教授と祭式の普及が、MS において最も原初的な目的であったことが窺える。

III 6-10 は I 6 及び I 8 と共通する特徴が多いものの、見えない背景を含む理解の難しい論理や、定型表現化した知識への言及が多く見られるという、I 6 や I 8 に見られない傾向が見られる。これは、III 6-10 が I 6 や I 8 の伝統を受け継ぎつつ、次に述べる祭式哲学の成熟期の影響を受けたことを意味すると考えられる。

6.2. 祭式哲学の成熟

祭式の意義を普遍的事実（当時の人々にとっての科学的、宇宙論的事実）に集約して述べるのは、哲学的な思考法の発展を示している。普遍的な命題（「A は B である」など）に、世界の事象を集約しようという態度であるから、論理は自ずと簡潔である。このような特徴を示すのは、I 4, I 5, III 1-5, IV 1 である。見えない背景を含む難しい論理は III-IV 巻で飛躍的に増え、祭式哲学が成熟期を迎え、専門家の間で議論が交わされていたことを推測させる。哲学議論の広まりを示すものとして、定型表現化した知識の普及も挙げられるが、これは III 1-5, III 6-10 に最も多く見られる。これらのことを総合的に判断すると、哲学議論の発展の中心を担ったのは、I 5 — III 1-5 — IV 1 と連なる伝統であると指摘できる。

I 4 は I 5 に似た特徴を示すことが多いが、大きな違いも見受けられる。そ

れは、I 4 が知識の内容として、先達の教えに言及することである。これは、すでにある程度確立された祭式の伝統に従う態度であり、哲学議論が高まった時期を過ぎた、祭式の古典期の始まりとも理解できる。I 4 は *yá eváṁ vidvā́n* を用いず *yá eváṁ véda* のみを使用することからも、祭式行為について哲学理論を深めることへの興味が薄れ、知識そのものに価値を置く傾向を強めていると考えられる。

6.3. 新たな哲学議論のスタイル

上の二つのグループには見られない、際立った特徴を示すのが、I 9 及び IV 2 である。それは、事象の列挙と属性の分類と共に、*yá eváṁ véda* が形式的に繰り返して用いられる用例である。このような繰り返しのせいもあり、*yá eváṁ véda / vidvā́n* の用例数そのものも大変多い。短い簡潔な理論を好む一方で、神話への言及も少なくなく、上の二つのグループと断絶はしていないと言えるが、形式的な繰り返しの示す記述の陳腐化は、成熟期の祭式哲学とは全く異なる傾向である。*yá eváṁ véda* の使用が多く、祭式行為への関心が薄れていることも理解される。

6.4. MS における章の相関関係と哲学思想の潮流

以上の考察を踏まえ、MS における章の相関関係と哲学思想の潮流を図に表すと以下のようになる：

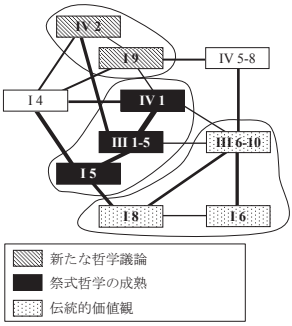

図4　MS における章の相関関係

7. 哲学思想の潮流と文化的・社会的背景

以上のように、MS において異なった哲学思想の発展段階あるいは潮流が見られることがわかった。最後に、この分類が、古ヴェーダ文献の文化的・社会的背景についての理解を深めることを指摘したい。*yá eváṁ véda / vidvấn* の使用法に関して、I 9 及び IV 2 が祭式哲学とも伝統的価値観とも異なった志向を示し、議論が形式的・表面的であり、祭式行為への関心も少ないことがわかった。この I 9 及び IV 2 は、記述される祭式の内容に関しても、言語的な表現を取っても、非常に特殊であること、また、sattra という特殊な儀礼と関係が深いことが、Amano (2016a:48-51, 57-60) で指摘されている。[11] sattra は、ヴェーダ祭式文化の中心的社会集団と離れて、独自の文化を保って生活していた、vrātya と呼ばれる集団が行っていた儀礼であると推察されている。しかし vrātya については断片的な記述が散見されるのみで、実態は解明されていない。

本稿において、*yá eváṁ véda / vidvấn* というフレーズを巡って、MS の作者達が何を「知識」と考えていたのかを考察し、哲学思想のいくつかの発展段階あるいは潮流を浮かび上がらせた。その潮流の一つが vrātya との関係が深いとすれば、ヴェーダ祭式とその教義が祭官階級というエリート集団に独占されていたという従来のヴェーダ社会像を変え、未解明の異文化集団についての理解を大きく進めることができる。

［註］

* 本研究はJSPS科研費JP16K02167の助成を受けたものです。

** 本稿は、International Conference “To the Sources of the Indo-Iranian Liturgies” Liège, 2016/6/10-11 における講演 “What is ‘knowledge’ justifying a ritual action? Uses of *yá eváṁ véda / yá eváṁ vidvấn* in the Maitrāyaṇī Saṁhitā” における考察を基に、哲学思想の展開に特に重きを置いて論じたものである。

*** MS の原本のテキストとして Schroeder（1881-1886）, Sātavalekar（1988）を用いた他、Harvard 大学 M. Witzel 教授より提供を受けている、複数の新写本の写真資料を参照した。

1） ヴェーダの諸文献の年代については Witzel（1989:249-251）, 後藤（2008:63-67）を参照。āraṇyaka 文献の年代については諸説があり、実際に各文献の成立年代の差異が大きいと思われるが、古いものについては brāhmaṇa の新層に近い古さを示すと考えられる。

2） AV 15 巻は vrātya 章と言われる。vrātya とは特殊な生活文化を持ち、放浪生活を送っていたと考えられる人々の集団であるが、これらの人々のヴェーダ祭式文化への影響が、近年見直されつつある。Pontillo / Dore (2016) を参照。AV 15, 2-14 には *yá eváṁ véda* が計 53 例現れる。 *yá eváṁ véda* の繰り返しを好む傾向は、MS の中でも vrātya との関係が深いと思われる I 9 及び IV 2 にも見られることから、この傾向が vrātya グループの言語の一つの特徴と言えるかもしれない。本稿 7 においてもこの問題に触れる。

3） Amano（校正中 1), (2016b:461-490), (2016a: 37-38), (2015:1161-1167).

4） Amano (2016b, 特に §484-486),

5） Amano（校正中 1; §3.6.2, §4.2), (2016b:487).

6） Amano（校正中 2; §4-5 及び n. 23).

7） Sakamoto-Goto (2005:974-941), (2009), Amano（校正中 2; §5 n. 23).

8） I 6,3(1):89,12f., I 6,3(7):91,9f., I 6,6(4):96,11-13, I 6,6(5):96,15-18, I 6,9(4):100,20-22, I 6,9(5):101,6-9, I 6,13(1): 107,10-12. I 6 以外の一例は IV 6,6:89,4.

9） edition Schroeder 及び Sātavalekar は gachāni の読みを取るが、Schroeder に用いられる M1 写本及び数本の新写本が gachāmi の読みを示す。Tichy（2006:96, 101）及び Amano（2009:159 n. 130）は gachāni（subjunctive 1. sg.）を前提として解釈しているが、gachāmi（present indicative 1. sg.）と先行する gamáyāmi（present indicative）との整合から、gachāmi が適切であろう。

10） I 9 における 5 つの用例（I 9,4(3):133,16f., I 9,4(4):133,20f., I 9,4(5):134,5f., I 9,4(6):134,11, I 9,4(7):134,16f.）は、同じ形式の繰り返し（4.9 を参照）であるので、数字上は高い数値を示すが、I 9 の特徴と見なすべきではない。

11） Vārāhaśrautasūtra Pariśiṣṭa 42 において caturhotṛka-gonāmika-「caturhotṛ 儀礼と gonāmika」（それぞれ MS I 9 と IV 2 のテーマ）は gṛhya 祭式（家庭祭）の方法で行うと規定されている。Rolland（1970:261-262）を参照。

［参考文献］

Amano, Kyoko (2009): *Maitrāyaṇī Saṁhitā I-II. Übersetzung der Prosapartien mit Kom-*

mentar zur Lexik und Syntax der älteren vedischen Prosa. [Münchner Forschungen zur historischen Sprachwissenschaft 9]. Hempen Verlag: Bremen.

――― (2015): "Style and Language of the Agniciti Chapter in the Maitrāyaṇī Saṁhitā (III 1-5)". *Journal of Indian and Buddhist Studies* Vol. 63, No. 3. 1161-1167.

――― (2016a): "Ritual Contexts of Sattra Myths in the Maitrāyaṇī Saṁhitā". *Vrātya culture in Vedic sources. Select Papers from the Panel on "Vrātya culture in Vedic Sources" at the 16th World Sanskrit Conference (28 June - 2 July 2015) Bangkok, Thailand*, ed. by T. Pontillo, M. Dore and H. H. Hock. DK Publishers Distributors Pvt. Ltd., Bangkok. 35-72.

――― (2016b): "Indication of Divergent Ritual Opinions in the Maitrāyaṇī Saṁhitā". *Vedic Śākhās. Past, Present, Future. Proceedings of the fifth International Vedic Workshop, Bucharest 2011,* ed. by J. E. M. Houben , J. Rotaru and M. Witzel. Cambridge. 461-490.

――― (校正中1): "Zur Klärung der Sprachschichten in der Maitrāyaṇī Saṁhitā". *Journal of Indological Studies* 26/27.

――― (校正中2): "*nírvapet* and *yājayet* in the Kāmyā-Iṣṭi Chapter of the Maitrāyaṇī Saṁhitā: Tradition and Practice in the Old Vedic Ritual Literature". *Proceedings of the 6th International Vedic Workshop, Calicut, 2014 January*.

後藤敏文（2008）:「古代インドの祭式概観―形式・構成・原理―」*Generalized Science of Humanity Series*『総合人間学叢書』vol. 3, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. Tokyo. 57-102.

Pontillo, Tiziana / Dore, Moreno (2016): "Inquiries into Vrātya-phenomenon: an introduction", *Vrātya culture in Vedic sources.* 1-34.

Rolland, Pierre (1970): "La litanie des quatre oblateurs (Maitrāyaṇī Saṃhitā I, 9)", *Journal Asiatique* 258. 261-279.

阪本（後藤）純子（2005）:「王族と Agnihotra」『印度学仏教学研究』vol. 53-2, 947-941.

Sakamoto-Goto (2009): "The Agnihotra and the Rājanya". 14th World Sanskrit Conference, Kyoto, September 2009.

Sātavalekar, Ś. D. 1988: *Yajurvedīya Maitrāyaṇī-Saṁhitā*. Aundh.

Schroeder, Leopold von (1881/1883/1885/1886): *Maitrāyaṇī Saṃhitā. Die Saṃhitā der Maitrāyaṇīya-Śākhā*. 4 Bde. Leipzig.

Tichy, Eva (2006): *Der Konjunktiv und seine Nachbarkategorien. Studien zum indogermanischen Verbum, ausgehend von der äteren vedischen Prosa*. Bremen.

Witzel, Michael (1989): "Tracing the Vedic Dialects". *Dialects dans les littératures indo-aryennes*, ed. by C. Caillat. Paris. 97-264.

（文学研究科招へい研究員）

SUMMARY

Study of 'Knowledge' Justifying a Ritual Action:
Uses of *yá evám̐ vidvā́n / véda* and Development of Philosophical Thinking in the Old Vedic Ritual Literature

Kyoko Amano

Veda means 'knowledge' and it is knowledge that the Vedic religion was dependent upon. This is shown by the well-known phrase *yá evám̐ véda / yá evám̐ vidvā́n* 'when he knows thus' / 'when he knows thus and does something', with the main sentence stating 'he obtains so-and-so effect or status', which repeatedly appears in Vedic texts.

In this paper, examples of *yá evám̐ véda / yá evám̐ vidvā́n* in Maitrāyaṇī Saṁhitā containing the oldest ritual explanations will be examined. We will see various uses of *yá evám̐ véda / yá evám̐ vidvā́n*. The most important point is that there are varieties for what is meant as 'knowledge': it is knowledge about mythological event in some cases, and it is knowledge about scientific fact in other cases. Examining what knowledge is meant by *yá evám̐ véda / yá evám̐ vidvā́n* is just an inquiry into development of thinking and values of people in Vedic period.

From the result of this examination, some development stages or streams of philosophical thinking are recognized. Chapters I 6, I 8 and III 6-10 show a traditional attitude to seek the source of a ritual action in myths, but chapters I 5, III 1-5 and IV 1 have a tendency to explain the meaning of a ritual action with general facts. The latter chapters seem to show maturity of ritual discussion, because many 'obscure' explanations that could have been changed among the ritual intellectuals are found in these chapters. Chapters I 9 and IV 2 show a special phase. They have a repeated use of *yá evám̐ véda* at enumeration of things and their attributes, that looks like a style of upaniṣads. This new stream of I 9 and IV 2 could indicate a movement of a social group called vrātya, that will open a new discussion about the society of Vedic period.